

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：14503

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13982

研究課題名（和文）オランダにおけるオルタナティブスクールの教育評価と質の維持・改善

研究課題名（英文）Educational Evaluation and Improvement of the Quality of Education in Alternative Schools in the Netherlands

研究代表者

奥村 好美 (Okumura, Yoshimi)

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号：30758991

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：オランダのオルタナティブスクールを中心として取り上げることで、授業・カリキュラム・学校レベルをつなぐ教育評価や質の維持・改善方策のあり方を見出すことを目的としていた。文献研究やフィールド調査を組み合わせ研究を進めた。その結果、オランダの教育評価制度を整理するとともに、オランダのダルトンスクールやモンテッソーリスクールなどにおける教育評価や質の維持・改善のあり方を具体的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

授業・カリキュラム・学校レベルの教育評価や質の維持・改善に関する取り組みや研究は、多くの場合個別に行われる傾向があったことに対し、本研究ではそれらをつなぐ視点を持って研究を進めた。また、これまで研究が手薄であったオランダのダルトンスクールやモンテッソーリスクールを含めて研究を実施してきた。それにより、オランダのオルタナティブスクールにおける具体的な教育評価や質の維持・改善のあり方を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to find effective ways to evaluate education in order to maintain and improve educational quality. A literature review and field study were used as the research method to analyze the educational evaluation system in the Netherlands. Methods of educational evaluation, maintenance, and improvement in alternative schools like Dalton and Montessori schools were also determined.

研究分野：教育方法学

キーワード：オランダの教育 オルタナティブスクール 教育評価 学校改善

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景として、次の2点があげられる。

1点目は、多くの場合、授業・カリキュラム・学校レベルの教育評価や教育の質の維持・改善に関する取り組みや研究は個別に行われる傾向があったことである。すなわち、授業については授業研究、カリキュラムについてはカリキュラム・マネジメント、学校組織については学校評価という具合である。しかしながら、授業は、カリキュラムの一部に位置付けられ、学校組織の体制によって支えられているなど、本来、授業・カリキュラム・学校レベルの取り組みはつながっている。授業・カリキュラム・学校レベルをつなぐ教育評価や、質の維持・改善方策が求められると考えられた。

2点目は、学習指導要領改訂に向けた動きの中で、これからの時代に求められる資質・能力の育成に関する議論が活発化していた。この点で、学校教育全体で多様な資質・能力の育成を目指すオランダのオルタナティブスクールの取り組みは示唆深いと考えられた。オランダのオルタナティブスクールに関する日本における先行研究としては、イエナプランスクールに着目するものが多く、ダルトンスクールやモンテッソーリスクールに関する研究は限られていた。

2. 研究の目的

オランダのオルタナティブスクールを中心として取り上げ、そこでの授業・カリキュラム・学校レベルの教育評価や質の維持・改善方策を検討することで、授業・カリキュラム・学校レベルをつなぐ教育評価や質の維持・改善方策のあり方を見出すことを目的としていた。ただし、ここでの授業レベルとは、それぞれの教育理念に基づき子どもたちに指導を行う取り組みのレベルを指すこととする。

3. 研究の方法

本研究では、オランダの代表的なオルタナティブスクールのうち、イエナプランスクール、ダルトンスクール、モンテッソーリスクールに焦点を合わせて、それぞれの教育評価や質の維持・改善方策を調査し、検討を行った。その際、それぞれのオルタナティブスクールの教育理念と照らし合わせながら検討を行なった。研究を進めるにあたっては、それぞれの学校協会が出版している機関紙や著作等を通じた文献研究と、実際に学校を訪問して行うフィールド調査を適宜組み合わせた。さらに、オランダのオルタナティブスクールが置かれている状況を踏まえるために、オランダの教育評価に関する制度（学校評価やカリキュラム、子どもの学力評価に関する制度）についても調査・検討を行なった。

4. 研究成果

主な研究成果として、ここでは2点取り上げる。

1点目は、オランダの教育評価に関する制度を整理したことである。オランダでは、教育の質を保証するために、教育・文化・科学省下の準独立機関である教育監査局が全ての学校の教育監査（学校評価）を行っている。教育監査の具体的な手続きは『監督枠組』に示される。『監督枠組』は、様々な教育関係者との協議によって作成される。2017年に出された『監督枠組』を見てみると、教育プロセス、学校の雰囲気、学習成果、質の保証と熱意、財政的マネジメントという5つの質の領域で評価が行われることになっている。

教育監査では、学校に改善の文化があるかどうか重視される。特に、長期的に改善を行い続けるような教職員全体での取り組みが文化として根付いているかが重視されている。例えば、先に述べた質の領域の「質の保証と熱意」においては、「学校やその運営機関（公立の場合は自治体、私立の場合は理事会）は、質を保証するためのシステムを導入し、それを教育の質を改善するために実際に使用している」「運営機関やその学校には、専門職的な質の高い文化があり、透明さと誠実さを持って運営されている」「運営機関や学校は、アクセス可能で信頼できる方法で自分たちの目標や結果について内的にも外的にも責任を負う。運営機関やその学校はこのことについて積極的な対話を行う」というスタンスが設定されている。このように、オルタナティブスクールを含むオランダの学校は、教育評価や質の維持・改善を行うことが求められていることが分かる。

さらに、「教育プロセス」においては、「提供される教育は、児童たちがその後受ける教育や社会に出た時に向けて準備させている」「学校は、児童たちが問題なく進歩できるよう彼らの発達をたどっている」「教師たちの教授行為は、児童たちが学び発達することを可能にしている」などのスタンスが設定されている。このように教育監査では、授業やカリキュラムレベルの質を問うスタンスも含まれている。

なお、子どもたちの学力評価に関しては、オランダでは、LVS(Leerlingvolgsysteem; 以下LVS)と呼ばれるモニタリングシステムの使用や、初等学校の最終学年で受ける最終テストを実施することが義務付けられている。モニタリングシステムとは長期にわたって定期的に子どもの発達や成長をモニターしていく評価システムのことである。ただし、モニタリングシステムや最終

テストは全ての学校が同じものを使わなくてはならないわけではなく、認められたものの範囲内で学校が選ぶことができる。

これらの成果については、「オランダの学校評価」(『中学校』No.794、2019年、pp.12-15)や「オランダの教育事情とイェナプラン 教育」(宇野宏幸、一般社団法人日本LD学会第29回大会実行委員会編『学びをめぐる多様性と授業・学校づくり』金子書房、2020年、pp.107-116)、「オランダの教育評価制度」(田中耕治編『よくわかる教育評価 第3版』ミネルヴァ書房、2021年、pp.254-255)などにまとめた。

2点目は、イェナプランスクール以外のオルタナティブスクールである、ダルトンスクールやモンテッソーリスクールに関する研究を進めたことである。

まず、ダルトンスクールについてである。ダルトンスクールが、ダルトンプランとしての教育の質を改善しようとする際、オランダにはそれを支援する機関が存在する。そのうちの一つであるダルトン・デーフェンター(Dalton Deventer)という高等職業教育(Hoger Beroeps Onderwijs: HBO)の高等教育機関に着目し、その機関に所属している専門家から指導を受けているA小学校の事例を検討した。

A小学校では、当時、ダルトン教育の質を改善するための2年間のコースに取り組んでいた。改善にあたっては、年に6日研究日が設けられていた。その研究日に、ダルトン・デーフェンターから専門家が来校した。その日は、教師たちが日常的に「実験(experiment)」してきたことが発表された。発表の際には、次の4点を含むレポートが教師一人ひとりによって作成された。1点目は「刺激」である。その取り組みを行なったきっかけとなった刺激を指す。具体的には、前回の研究日に学んだこと、もしくは教師が読んだ文献などに基づき、どのような理念や概念等から刺激を受けたかが記される。2点目は、「活動」である。具体的にその教師が自分のクラスで行なった「実験的」「刷新的」活動が記される。3点目は「評価」である。活動の結果、その教師が経験したことが、子どもの姿の変化に着目しつつ記される。4点目は「アカウントビリティ」である。その教師が学んだ文献と選んだ活動の間の関係が説明される。この4点の明示化が求められることによって、教師たちがダルトンプランの理念に基づきつつ、日々の授業で新たな試みを行い、それを評価することが促される。さらに、アカウントビリティ欄があることによって、教師が改めて自身の取り組みを理論的に位置付け直すことになる。そして、こうした取り組みが研究日に共有されて、再度繰り返されることで、学校でそれぞれの取り組みが共有され、少しずつ教育活動の質が高まっていくようになっている。教師たちは、場合によっては他の教師と共働して「実験」に取り組むこともできる。

こうした取り組みによって、ダルトンスクールとしての理念や理論を共有しつつ、教師が感じる課題や目の前の子どもたちの様子にあった挑戦が可能となっていた。また、学校のゴールのもとで教師たちの自律性が尊重されつつ、ゆるやかにつながり高め合える関係が構築されていることがうかがえた。この取り組みは、教師一人ひとりには授業レベルでの改善を行いつつも、全教師がつながりながら学校教育の質を組織的に改善しており、その結果カリキュラムの改善が行われていた事例であると捉えることができると考えられた。

また、オランダダルトン協会では、ダルトン教育の質を保証するために訪問視察という学校評価を実施している。そこでも、ダルトンプランの原理に基づいて授業・カリキュラムレベルの取り組みが実施されているかや、ダルトンスクールとして組織的に取り組まれているか、さらにそれを支える要因(学校理事会や保護者との関係など)が評価されている。上述のような取り組みを支えるものとして位置づいていると考えられた。

こうしたオランダのダルトンスクールに関する研究は、教育目標・評価学会で発表したり、「オランダにおけるダルトンスクールの教育の質改善に関する一考察」(『兵庫教育大学研究紀要』第55巻、2019年、pp.65-72)を執筆したりした。

次に、モンテッソーリスクールについてである。オランダのモンテッソーリ教育協会は、オランダダルトン協会と同様に、モンテッソーリ教育の質の保証のために実施している学校評価である訪問視察を行なっている。この訪問視察に着目をして、検討を行なった。訪問視察では、モンテッソーリ教育の理念に基づき、授業・カリキュラムレベルの取り組みが実施されているかが評価されていた。特に2007/08年以降の訪問視察では、モンテッソーリスクールが自己評価を行い、モンテッソーリスクールとしての質の維持・改善を行うことが求められるようになっていた。さらに、訪問視察では、モニタリングシステムを用いて子どもの学習の進歩や発達をたどることが求められており、そのためにモンテッソーリ教育用のモニタリングシステムが開発されていた。それは、教師による子どもの日常的な学習の観察と記録に支えられたシステムであった。モンテッソーリ教育において大切にしたい点である、子ども一人ひとりが教材から学び、教師はそれを観察・記録するという評価のあり方を守るために開発されたものであると考えられた。こうしたオランダのモンテッソーリスクールに関する研究は、教育目標・評価学会で発表するなどして成果を発信した。

以上のような検討から、オランダでは、教育監査を通じて各学校が授業・カリキュラム・学校レベルで長期的に改善を行い続けることが重視されていることや、オランダのオルタナティブスクールでの教育評価や質の維持・改善のあり方を具体的に明らかにすることができた。そこでの教育評価や質の維持・改善としては、授業とカリキュラムレベルの取り組みは密接に関わって実施される傾向があり、その取り組みを学校評価が支える形で位置づいていると考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 奥村好美	4. 巻 55
2. 論文標題 オランダにおけるダルトンスクールの教育の質改善に関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 兵庫教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 65-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 奥村好美、萩野奈幹	4. 巻 53
2. 論文標題 オランダにおけるピースフルスクールの授業づくりに関する教育方法学的一考察 日本での授業づくりに活かすために	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 兵庫教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 149-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 宮田佳緒里、奥村好美	4. 巻 52
2. 論文標題 ループリックとチェックリストによる評価結果の関連性の検討 効果的な使い分けのために	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 兵庫教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 117-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 奥村好美、小池理平	4. 巻 52
2. 論文標題 兵庫県A市における公立小・中学校の学校評価の実態に関する一考察 アンケートの内容に着目して -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 兵庫教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 127-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 奥村好美
2. 発表標題 「オランダの場合」（ラウンドテーブル「変動する世界の入試改革」にて）
3. 学会等名 日本カリキュラム学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshimi Okumura & Namiki Hagino
2. 発表標題 Developing Japanese Lesson Plans Based on a Foreign Lesson Program: A Collaborative Study
3. 学会等名 World Association of Lesson Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Namiki Hagino & Yoshimi Okumura
2. 発表標題 Adopting a Dutch program in Japanese moral education through a collaborative lesson study
3. 学会等名 World Association of Lesson Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 奥村好美
2. 発表標題 学校の多様性・子どもの多様性を尊重する教育とは？～オランダの事例から～（シンポジウム「海外の実践から日本型インクルーシブ教育を考える 子どもが多様性、学校の多様性をふまえて」にて）
3. 学会等名 日本LD学会第3回研究集会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 奥村 好美
2. 発表標題 オランダのイエナプラン教育における教育評価に関する一考察 真正の評価論の視点から
3. 学会等名 日本教育方法学会第54回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 奥村好美
2. 発表標題 オランダにおけるダルトン・プランのカリキュラム改善に関する一考察
3. 学会等名 教育目標・評価学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 奥村好美
2. 発表標題 オランダにおけるモンテッソーリスクールの教育の質の評価
3. 学会等名 教育目標・評価学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 日本カリキュラム学会編（執筆者：奥村好美、他52名）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 教育出版	5. 総ページ数 402（担当pp. 251-254）
3. 書名 現代カリキュラム研究の動向と展望	

1. 著者名 石井英真、西岡加名恵、田中耕治編（執筆者：奥村好美、他33名）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本標準	5. 総ページ数 244（担当pp.156-161）
3. 書名 小学校新指導要録改訂のポイント - 新3観点による資質・能力の評価がわかる！（「カリキュラム・マネジメントと教育評価の役割」担当）	
1. 著者名 奥村好美（田中耕治編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 230（担当pp.78-79、pp.100-101、pp.196-197、pp.222-223）
3. 書名 よくわかる教育課程 第2版（「学校評価」「オランダのカリキュラム」等を担当）	
1. 著者名 田中耕治・細尾萌子編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 216（担当pp.168-182）
3. 書名 新しい教職教育講座6 教育課程・教育評価（「カリキュラム評価と学校評価」担当）	
1. 著者名 伊藤実歩子編著、奥村好美、他9名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 278（担当pp.21-44）
3. 書名 変動する大学入試 資格が選抜か ヨーロッパと日本（「見直され続けるオランダの中等教育修了資格試験 教育の論理に根差す試験とは」担当）	

1. 著者名 宇野宏幸、一般社団法人日本LD学会第29回大会実行委員会編、奥村好美、他13名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 142 (担当pp.107-116)
3. 書名 学びをめぐる多様性と授業・学校づくり (「オランダの教育事情とイエナプラン教育」担当)	

1. 著者名 梶田勲一、浅田匡、古川治監修、古川治、矢野裕俊編著、奥村好美、他12名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 270 (担当pp.100-117)
3. 書名 (シリーズ・人間教育の探究2)人間教育をめざしたカリキュラム創造 「ひと」を教え育てる教育をつくる (「教育の自由とカリキュラム オランダの場合」担当)	

1. 著者名 田中耕治編著、奥村好美、他22名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 263 (担当pp.254-255)
3. 書名 よくわかる教育評価 第3版 (「オランダの教育評価制度」担当)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------